



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.31 2006.06.

目次

フォーラム	修復(レスタウロ)」という視点	民岡 順朗	1
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河大次郎 阿部貴弘	3
地域のニュース	両毛地域の歴史巡り～関東武士の気風あふれる土木遺産～	為国 孝敏	4
関連団体ニュース	近代化遺産の全国一斉公開事業に参加しませんか	全国近代化遺産活用連絡協議会	4
海外土木史	建設史に関する国際会議に出席して	五十畑 弘	5
学会の動き	第26回土木史研究発表会「開催のお知らせ		6
お知らせ	土木遺産の保存 活用に係る連合小委員会について	北河 大次郎	8
	志免壱坑槽、「見守り保存」へ	山田 圭二郎	8
土木史関係図書		横松 宗治	8

フォーラム

「修復(レスタウロ)」という視点

(株) オリエンタルコンサルタンツ 民岡 順朗



筆者は、会社の支援を得て1998年から2003年までの5年間イタリアに留学し、フィレンツェ、ローマを本拠地に、文化財修復の理論と実践に携わった。会社では都市・地域計画に携わっているのので、「土木技術者がなぜイタリアに？ましてやなぜ修復を？」と訊かれるが、それなりの理由がある。

イタリアは歴史を大切にする国である。そして、古い街がしっかりと残っている。歴史的都心部のことを「チェントロ・ストリコ (centro storico)」と呼ぶが、そこは、統一感のある街並みが美しいだけでなく、さまざまな都市機能が集約されていて、徒歩や自転車であいていのあるところに行くことができる。そして、職住近接のコンパクトシティとなっており、歴史・文化遺産などの地域資源が生きている。イタリアの歴史的都心部には、日本の「都市再生」にとって、重要なヒントが見つかるように思う。

これがイタリアに興味を持った理由のひとつ。

もうひとつの動機が「修復」である。まずは、「土木と修復の接点」に着目してみよう。

イタリアで歴史的都心部が残っているのは、ひとえに「修復」のおかげである。古いものを壊さずに修復して使う。この価値観は、郊外(城壁外)に向けた開発をせずに、時代時代の要請に応じた更新を

図りつつ、都市のあらゆる活動を都心部に集約した「コンパクトシティ」の発想につながっていく。

コンパクトシティとは、「空間的に小さいまち」、「機能が集約されたまち」というだけでなく、「時間が重層しているまち」でもある。修復を重ねた結果、長い長い歴史が凝縮されたまちなのである。

さて、その「修復(レスタウロ)」とは、「時間の経過とともに被った“変質”について評価し、マイナスと考えられる事象(損傷など)に必要な処置を施して、未来に向けて持続できる条件を与える行為」である。この分野の先進国イタリアでは、そのように理解されている。「修理」、つまり「ある部分が壊れたから直す」という行為とはまったく異なるのだ。

「社会資本ストックの維持・活用」が、土木や都市再生、地域づくりのキーワードになっているが、日本では、財政負担の軽減、廃棄・建設にともなう環境負荷の軽減など、「マイナスの抑制」が動機になっていて、なんとなく後ろ向きだ。

技術者の側にも、「ほんとうは新しい道路や橋を設計したいのだ。まちをつくりたいのだ」という未練や後ろめたさがあるのではないか。

日本が成熟国家を目指すなら、「否定の否定」ではなく、「肯定」を理念に掲げるべきである。重層し

た歴史が落ち着いた佇まいを醸し出し、未来へ歩みだすための確固たる基盤となるような、“ヴィンテージ都市”を「修復」を通じて築いていくべきである。

チェントロ・ストリコを歩くと誰もが気づくように、イタリアでは、「美術—建築—土木—都市」の間に、明瞭な区別がない。違いといえば、スケールの差くらいである。

人間の生活する領域が一体として保全されているためであるが、目に触れるものすべてが溶け合っており、都市全体が「一個の芸術品」となっている現在の状況は、ルネッサンス期、さらに、古代ギリシア・ローマにまで、その原因を遡ることができる。



芸術のまちアスコリ・ピチーノ中心部の広場

いま話題のダ・ヴィンチは、芸術家であっただけでなく、科学者、工学技術者として、さまざまな実験成果や作品を残している。ミケランジェロは、絵画・彫刻以外に、カンピドリーオ広場などを設計した。ラッファエッロにしても、「ヴィッラ・マダーマ」（ローマ市内）のように、建築・内装・庭園の一体的なプロジェクトを手がけている。

イタリアでは歴史的にみて、自然—人工物（城壁外—城壁内）の区分はきわめて明確であるが、都市（城壁内）は一体的な空間と考え、絵画・彫刻・建物・街路・広場などを、別々の要素とは考えてこなかった。このことは、古代の宇宙観、「人体（ミクロコスモス）は宇宙＝神（マクロコスモス）の似姿であり、都市はその中間項である」という思想を受け継いだものなのである。

ここにも、重要なヒントがある。修復や保全を考えるときに、土木構造物や建物をバラバラの要素として捉えるのではなく、都市や生活圏という“有機体”を構成する一部として捉えることが重要であると思う。そのようなスタンスが、土木遺産や建築遺産を真の“地域資源”として活用し、都市再生や地域づくりを実現するための糸口となるのではないか。

さらに、古いものが背景に、現代的なものが前景にくるような仕掛けを施すと、私たちの生活の舞台

である都市は、いっそう美しくなる。このことについては、拙著『「絵になる」まちをつくる イタリアに学ぶ都市再生』（NHK出版）を参照して欲しい。



ボローニャ都心部
古い街並みや石畳を背景にしたモダンなバス

つぎに、「土木史と修復の接点」に着目しよう。

修復とは、「時間の経過とともに被った“変質”について評価し、マイナスと考えられる事象に必要な処置を施して、未来に向けて持続できる条件を与える行為」であった。

修復とはまた、「作品（対象物）が辿ってきた歴史上のあるポイントを“理想点”として摘出し、そのような過去において“こうだったであろう”という状態を想定して、“復元する”営み」でもある。

どちらにしても、修復とは、「歴史行為」といえる。歴史に介入し、新たな歴史をつくりあげる行為であるわけだから、「歴史学」と切っても切れない関係にある。実際、イタリアでは、美術史や建築史が、人文系大学教育において、重要な地位を占めている。そして、絵画や建物の修復事業の発注に際して、歴史専門家により、対象物の綿密な考証が行われる。

また、歴史的考証と並行して、対象物や付属物の構造や組成に対する物理的・化学的検査が行われる。たとえば、有名な壁画『最後の晩餐』については、レオナルド・ダ・ヴィンチの手によると従来思われてきた絵具層は、オリジナル作品の層と後世の加筆層との合成物であることが検査の結果、判明した。その後、損傷を抱えた加筆部分の絵画層薄片を定着すべきか、除去すべきかが議論され、作品の判読性の向上と、後の修復作業の容易化・確実化（絵画全体の物理的構造の単純化）を目的に、加筆層を可能な限り除去する方針が決定されたのである。

最後に、「土木史」が考証研究にとどまることなく、「土木構造物の修復」という実践を支える理論的基盤となること、そして、修復された土木遺産の活用を通して都市再生や地域活性化に貢献していくことを期待するものである。

文化財ニュース

文化財となった土木関連建造物等一覧

【重要文化財】4月答申分)

所在地	名称 年代]	概要
栃木県 那須塩原市	那須疏水旧取水施設 東水門、西水門、導水路及び余水路 明治 39]	水門及び導水路等が旧態を良好に保持して残り、近代における大規模水利施設の取水システムの構成を知る上で、高い価値がある。那須野々原の基盤施設であり、明治期有数の規模を誇る那須疏水の代表的遺構として重要。
兵庫県 神戸市	布引水源地道水道施設 分水堰堤、分水堰堤附属橋、分水隧道 明治 40]	神戸水道事務所の吉村長策および佐野藤次郎を中心として建設が進められた。伝統的風景に配慮した貯水・取水機能に、分水・放水機能を付加して土
		締切堰堤、放水路隧道 明治 41]
		五本松堰堤 明治 33]
		谷川橋 大正初期]
	雌滝取水堰堤、布引水路橋(砂子橋) 明治 33]	砂流入防止を図るという、計画上の特色がある。神戸の創設水道施設で、建設当時、最大規模を誇った明治期を代表する水源地道水道施設のひとつである。中でも、五本松堰堤は、わが国における重力式コンクリート造堰堤の嚆矢で、近代堰堤の一つの規範を示す構造物として、土木技術史上、高い価値がある。

【登録有形文化財】1月答申分)

所在地	名称 年代]	概要
北海道 小樽市	JR小樽駅本屋 昭和 9]	小樽港に正面を向ける。鉄筋コンクリート造駅舎で、中央にトップライト付きのホールを設け、その左右を二階建、両端を平屋建とする。傾斜地を利用したホール、地下道及び2階レベルのプラットホームの構成に特色がある。
	JR小樽駅プラットホーム 昭和 9]	
岐阜県 高山市	足洗谷第一号砂防堰堤 昭和 9]	重力式コンクリート造、堤高10mの本堰堤を中心とした砂防施設。
	岩坪谷第一号砂防堰堤 昭和 9]	第一号が堤高10m、第二号が堤高8m、第三号が堤高6mの重力式コンクリート造堰堤。平湯川右支岩坪谷の上流域にあり、周囲の緑の回復に寄与している。
	岩坪谷第二号砂防堰堤 昭和 13]	
	岩坪谷第三号砂防堰堤 昭和 12]	
	日影第一号砂防堰堤 昭和 27]	
		堤体のほぼ中央に欠円アーチ形暗渠を設ける重力式コンクリート造堰堤。

【登録有形文化財】3月答申分)

所在地	名称 年代]	概要
茨城県 高萩市	石岡第一発電所	取水堰堤 明治 44/大正期増設]
		沈砂池 明治 44]
茨城県 北茨城市	石岡第一発電所	第一水路橋、第二水路橋、水槽、余水路及び排砂路、調圧水槽、本館発電機室 明治 44]
		本館旧開閉器室 大正初期]
	石岡第二発電所	取水堰堤、沈砂池、余水路、水槽、鉄管路擁壁、本館 大正 2]
群馬県 高崎市	三沢川砂防堰堤 昭和 13]	本堰堤、副堰堤からなる重力式コンクリート造堰堤。
	烏川上流砂防堰堤 昭和 26]	岩盤上に築かれた堤長67mの大規模な重力式コンクリート造堰堤。
群馬県 榛名町	榛名川上流砂防堰堤 昭和 30]	堤長67mの大規模な重力式コンクリート造堰堤。
広島県 福山市	堂々川一番砂留 江戸後期/明治期増築]	芦田川水系堂々川に建設。最下流にある一番砂留は、近世に遡る石積み堰堤の一部。二番砂留、四番砂留は乱積、算木積、谷積など異なる石積構法に技術の時代的特色を示す。三番砂留と五番砂留は、緩やかなアーチ平面を描く。六番砂留は藩政期に築かれた堂々川砂防施設の中で最大規模。
	堂々川二番砂留 江戸後期/大正前期改築]	
	堂々川三番砂留 天保 3 頃 1832/明治期増築]	
	堂々川四番砂留 江戸後期/大正前期改築]	
	堂々川五番砂留 天保 6 頃 1835/明治期増築]	急勾配の堂々川右支に築かれた大規模な砂留。
	堂々川六番砂留 江戸後期/明治期増築]	
	鷹ヶ迫砂留 江戸後期/明治期・大正期増築]	
	内広砂留 江戸後期/明治期増築]	堤長21m堤高3.8m規模で、近世に遡る石積堰堤。
山口県 岩国市	JR西岩国駅駅舎 昭和 4]	木造平屋建てで、半円アーチの上げ下げ窓を整然と配す。

両毛地域の歴史巡り～関東武士の気風あふれる土木遺産～

足利工業大学 為国 孝敏

足利を中心として栃木県、群馬県にまたがる地域は両毛地域と呼ばれ、古くから東山道を通じて京都とのつながりが深い地域であり、また中世武家社会を作り上げた関東武士の発祥の地でもある。さらに近世・近代を通じて進取の気風に富んだ土地柄であり、多くの人材を輩出した地域でもある。

両毛地域の中心を流れるのが古くから暴れ川として名高い渡良瀬川である。渡良瀬川は、明治期の足尾鉍毒事件や渡良瀬遊水地が有名であるが、両毛地域の歴史は渡良瀬川を取り巻く歴史ともいうことができる。中心となる足利市には、源姓足利氏の菩提寺である「ぼん阿寺」や足利学校、近代の織物産業による煉瓦倉庫など、歴史と文化を感じさせる構造物が数多く残っており、週末には多くの観光客が訪れる。また、このような歴史や文化財を生かしたまちづくり活動が盛んな地域でもある。

今回、土木史研究発表会を足利工業大学で開催するにあたっては、足利市を含めた両毛地域の歴史を生かしたまちづくりを企画セッションとして準備し、皆さんと議論させていただく予定である。その中で

は、足利市の近代における織物産業に関わるまちづくりや、桐生市の16世紀末期に作られた町割りが残る桐生新町のまちづくり（ここでは、伝統的建造物群保存地区や世界遺産登録に向けた市民活動が盛ん）、中世の山城として名高い太田市の金山城址をいかしたまちづくりについて、事例を紹介しながらパネルディスカッション形式を予定している。

前日の見学会では、「太田市・桐生市の中世から近代を探る」をテーマに、足利氏・新田氏をはじめとする関東武士の領地経営やインフラ整備、さらに近代化遺産の宝庫とされる桐生市の町並みなど、両毛地域の土木遺産をハード、ソフト両面から堪能していただく予定である。

両毛地域には、中世以降培ってきた気風が今に脈々と継承されてきており、地域の生活に根ざした（とけ込んだ）土木遺産が多い。市民のまちづくり意識が高い地域で、行政とのパートナーシップによる歴史を生かしたまちづくりについて、幅広い視点でのご指導ご助言をいただきたいと考えている。

関連団体ニュース

近代化遺産の全国一斉公開事業に参加しませんか

全国近代化遺産活用連絡協議会

普段何気なく利用している近代の駅舎や橋梁、人々の生活を今も支え続ける水道・発電施設、地場産業の発展の礎となった町工場など、われわれの生活に身近な存在である近代化遺産（幕末から第2次世界大戦期までの間に建設され、わが国の近代化に貢献した産業・交通・土木に係る建造物）は、新たな観光資源、さらには魅力的なまちづくりや伝統産業の振興のよりどころとして、近年、急速に社会的関心を集めています。

地方公共団体を中心とした全国組織である「全国近代化遺産活用連絡協議会（略称、全近）」は、工部省の設立日である10月20日を「近代化遺産の日」と定め、その日に全国の近代化遺産を一斉に公開するとともに、近代化遺産の価値や魅力を広く伝えるためのシンポジウムや見学会などを、文化庁、国土交通省、経済産業省、土木学会等のご後援を賜りながら、昨年度より始めました。今年度も以下の要領で開催を予定しています。

先人が丹誠込めて築き上げた近代化遺産を、今も大切に保守管理されている自治体や企業、あるいはこうした活動の輪に入り、共に近代化遺産を活かした地域の活性化を推進したいと考えておられる団体、研究者、個人の方々などの参加をお待ちしています。

・期 間：2006年10月20日（金）～22日（日）

（ただし、当該期間における実施が困難な企画（従来より一定の期間に実施されている企画等）のうち、10月1日（日）から11月30日（木）の間に開催されるものについては、当該事業の一環と位置づけることができます。）

・締め切り：2006年8月末（予定）

・対 象：近代化遺産および近代の建造物全般

（文化財未指定・未登録の物件も歓迎します）

・広 報：一斉公開関係の情報を集約したパンフレットを作成・配布予定です（企業広告も受け付けます）

・問い合わせ先：財団法人日本ナショナルトラスト

（担当：土井） 電話 03-3214-2631

※全近の会員もあわせて募集しております！

建設史に関する国際会議に出席して

日本大学生産工学部土木工学科 五十畑 弘

建設史に関する国際会議 (The 2nd International Congress on Construction History) が、本年3月末から4月にかけてイギリスのケンブリッジ大学・クイーンズカレッジで開催され、参加の機会を得たので概要を報告する。

かつてオーストラリアで開催された同種の国際会議に参加をしたことがあるが、今回の会議は規模がはるかに大きく、参加者数約300名、発表論文数190編、発行された論文集は3冊、合計3,400頁に上った。

第1日目の午後から開始された会議は、5日目の午前中まで続き、途中半日の見学会をはさみ、実質丸4日間の長丁場であった。毎日基調講演が行われ、これに続いて、3つのセッションで論文発表が行われた。

発表分野は、建築と土木の両方にまたがる建設史全般であるが、論文・参加者の専門で区分すれば、建築3に対し、土木1程度の割合であった。ただし、国内の土木と建築という区分とはやや異なり、エンジニアリングとアーキテクチャーというくくり方で、建築物である教会のアーチ型丸天井の修復のテーマで構造解析、修復施工などの面からのアプローチは、エンジニアリングの範疇になる。

参加者は欧米諸国が主体で、主催国のイギリスほか、前回開催国のスペインを始めとする欧州諸国、およびアメリカ、カナダ、ベネズエラのほか、アジアから台湾、日本を含め合計21カ国に及んだ。

合計6回行われた基調講演は、アーキテクトとエンジニアの相互乗り入れの会議を意識した「アーキテクトとエンジニアその永遠なる二重性について」とか、エンジニアの立場から「建設史における構造解析：利点と危険性」といったテーマ、あるいは、建設史のアイデンティティに関する「建設史—技術史と文化史の間で—」といったテーマや、ジェンダーに関する「語られなかった歴史：建築業における女性たち」といった講演が行われた。

論文発表の分野は非常に多岐にわたったが、全体的な印象としては、例えばアーチ型丸天井、木組建築、木造丸天井、石造塔、石造建築、レンガ構造物、橋梁、鉄筋コンクリート、PCコンクリート構造、石材加工など「もの」にかかわるテーマが多く、まちづくり、制度、行政のしくみ、建設産業、教育な

ど、国内におけるいわゆる計画系のテーマは少なかったように思われる。筆者は大学教育における建設史に関するテーマとして、土木史教育に関する発表を行ったが、同種のテーマの発表は他にはなかった。

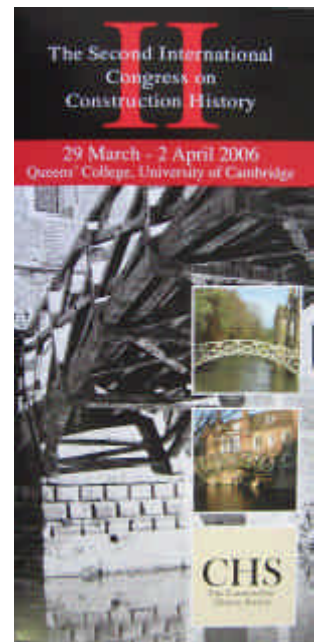
今回の国際会議を主催した建設史協会 (The Construction History Society) は、1982年にイギリスで設立されたもので、セミナー、出版、見学会などを定期的に開催してきており、国際会議としては、2001年にマドリッドで第1回を開催し、今回が第2回目である。

(ホームページ: <http://www.constructionhistory.co.uk/>)

この建設史協会の活動目的は、コンファレンスや調査活動の企画・実施あるいは支援を通じて建設史研究を活性化し、他の文化団体と協力をして建設遺産に対する一般の理解増進を図り、建設遺産の保存を進めることとされている。

今回の会議は、研究発表に加えて、16世紀創設の大学内の歴史的ホールでの会食や演奏会など、夜のイベントも非常によくオーガナイズされ、参加者の満足度の高いものであったが、参加費もほぼそれに比例していた。会議のみの参加で約330ポンド(8万円程度)、大学内での宿泊費込みでその倍の660ポンド(16万円程度)であった。また、この会議には、政府機関や建設業に関するレンガ協会などのいくつかのスポンサーがついており、会議運営費負担や、会食でのワインの提供などを分担して支援がされていた。

次回の第3回国際会議は2009年にドイツのベルリン南郊のコットバスでの開催が予定されている。



会議パンフレット

木造橋はケム川に架かる数学橋

『第26回土木史研究発表会』開催のお知らせ

- 主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会 <http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>）
- 期 日：【研究発表会】2006年7月7日（金）・8日（土） 【見 学 会】2006年7月6日
- 会 場：足利工業大学（8号館）（栃木県足利市大前町268-1） <http://www.ashitech.ac.jp>
交通案内：東武鉄道伊勢崎線「足利市駅」下車、スクールバス、タクシー（約2,000円）で15分。
JR両毛線「山前駅」下車、徒歩20分、スクールバス、タクシーあり。
大学では駐車場を用意しておりますので、お車での利用も可能です。
- 参加費：会員・非会員：2,000円、学生会員：1,000円
論文集および講演集販売：合冊（論文集Vol.25＋講演集Vol.26）：6,000円
論文集のみ：2,000円 講演集のみ：4,500円 ※当日会場にて申し受けます。
- 懇親会：1) 日 時：2006年7月7日（金）17:00～18:30
2) 会 場：ニューミヤコホテル本館（足利市南町4254-1、東武伊勢崎線「足利市駅」隣接、TEL：0284-71-3333）
3) 参 加 費：4,000円程度を予定
4) 参加方法：当日会場にてお申し込み下さい。

◆7月7日（金）

時間	第1会場（814室）	第2会場（815室）	第3会場（812室）
10:00	開会挨拶 土木史研究委員会委員長 伊東 孝		
10:15	【橋梁Ⅰ】 司会 中井 祐（東京大学） 1 旧国鉄宮原線に現存するコンクリートアーチ橋に関する調査 玉井孝幸（工学院大学）・小林一郎・渡邊英樹・高英雄	【鉄道】 司会 小西 純一（信州大学） 8 明治期における鉄道用ランプ小屋に関する考察 -稲荷駅ランプ小屋の建設年代について- 小野田滋（財）鉄道総合技術研究所	【河川Ⅰ】 司会 大熊 孝（新潟大学） 14 斜め堰の実態とその類型 岩屋隆夫（東京都）
	2 津軽海峡沿岸に残る鉄道土木遺産群について -大間、戸井のコンクリートアーチ橋梁を中心として- 進藤義郎（㈱ドーン）・葛西章・垂澤憲吉・原口征人・今尚之	9 都市高速鉄道における高架式・地下式選択事由に関する調査研究 西淳二（NPO ジオテクチャーフォーラム）・Harris Fabillah・清水隆文・西田幸夫	15 河川開発史を通して見た吉野川第十堰の特徴と土木史上の評価 岩屋隆夫（東京都）
	3 ロベール・マイヤールの構造デザインと設計思想 その2 -無筋コンクリートアーチ、鉄筋コンクリートアーチに関する考察- 鈴木圭（㈱アバン アソシエイツ）	10 宗谷線剣淵・士別間鉄道防雪林の技術的特徴と北海道における鉄道林の変遷 小川直仁（R 北海道㈱）・小山雅己・池田元基・今尚人・五十嵐日出男	16 大河津分水路で自在堰が設計された社会的背景に関する研究 木下篤彦（国土交通省）・松井健一・松澤嘉啓・五百川清
11:55	4 近代土木遺産「平木（水路）橋」の評価について 神吉和夫（神戸大学）		17 空間特性と建設経緯にみる白水堰堤の造形的特徴 星野裕司（熊本大学）・松尾和人・小林一郎
13:15	【橋梁Ⅱ】 司会 五十畑 弘（日本大学） 5 我が国における明治期の近代的木造吊橋構造の展開 その2 -天竜川及び豊川水系における吊橋の変遷- 山根巖（石原工業㈱）	【道路】 司会 原口 征人（北海道開発技術センター） 11 明治期の地方土木財政 福岡県の道路政策を事例として 畑岡寛（九州共立大学）・田中邦博・出光隆	【水路・用水】 司会 藤井 三樹夫（水環境研究所） 18 仙台北流堀の現況調査について 松山正将（東北工業大学）・菊地清文・花淵健一・佐伯吉勝
	6 我が国における明治期の近代的木造吊橋構造の展開 その3 -富山県下の庄川水系等における吊橋の変遷- 山根巖（石原工業㈱）	12 明治時代における長野県の道路行政について 山浦直人（長野県）・小西純一	19 藩政期に造られた金沢の用水について 池本敏和（金沢大学）・小高航・北浦勝・安達寛・平嶋正実・吉藤通章
14:30	7 古構造学の創生に向けて 本田泰寛（熊本大学）・小林一郎・星野裕司	13 バス縮小期における地方の幹線都市間バスの変遷にみる諸問題の考察 -群馬県高崎・前橋市を中心とした路線を事例として- 大島登志彦（高崎経済大学）	20 辰巳用水の建設目的に関する逆サイフォン送水量から見た検討 玉井信行（金沢大学）・山田朋彦
14:40	企画セッション「両毛地域の歴史的まちづくり」 司会 為国 孝敏（足利工業大学） 両毛地域の土木遺産 為国孝敏（足利工業大学） 太田市の金山城址を活かしたまちづくり 金澤 誠（太田市教育委員会） 桐生市の桐生新町とまちづくり 稲村秀樹（桐生市教育委員会） 足利市の織物とまちづくり 福島二朗（足利工業大学）		
16:20			
17:00	懇親会（ニューミヤコホテル本館 足利市南町4254-1、東武伊勢崎線「足利市駅」隣接、TEL 0284-71-3333）		
18:30			

6. 見学会：1) 日 時：2006年7月6日(木) テーマ：太田市・桐生市の中世から近代を探索
 【集合】11:30 JR 足利駅、12:00 東武足利市駅、12:30 足利工業大学 【出発】13:00 足利工業大学 → ①丸山宿(江戸期の伝統的集落群)→ ②史跡金山城址(関東武士の戦国絵巻)→ ③生品神社(新田義貞拳兵の地)→ ④江田館跡(中世関東武士の館跡)→⑤桐生新町(有鄰館)と桐生の近代化遺産→【解散】18:15 足利工業大学、18:40 JR 足利駅・東武足利市駅
 2) 募集人数：40名(先着順)
 3) 参加費：1,000円(昼食弁当・飲み物付き)
 4) 問い合わせ・申込み先：電子メールで開催校委員・福島二郎まで。E-mail:fuku@ashitech.ac.jp
 7. 宿泊案内：6日、7日の両日、上記のニューミヤコホテルで優待宿泊を受け付けておりますので、希望される方は直接ホテルへお申込下さい。お申込の際には「土木史研究発表会」参加者であることを告げて下さい。宿泊費は、1泊朝食付き7,300円です。

◆7月8日(土)

時間	第1会場 (814室)	第2会場 (815室)	第3会場 (812室)
10:00		【景観】 司会 佐々木 葉 早稲田大学)	【河川Ⅱ】 司会 島谷 幸宏 九州大学)
		31 兼六園の経済的価値に関する研究 玉井信行 金沢大学) 岩井隆宏	44 角倉了以の保津川航路開削時に設置された「氷寄せ」に関する調査 石垣泰輔 関西大学)・馬場康之・川中龍児・桑岡健太郎
		32 昭和初期における足利都市計画風致地区の設定過程についての一考察 福島二郎 足利工業大学)・中川三朗 堀口恭兵	45 不連続堤の機能と分類に関する研究 寺村淳 新潟大学)・大熊孝
		33 埼玉県に現存する煉瓦水門の景観特性と歴史的印象 穴戸勇気 埼玉大学)・深堀清隆 窪田陽一・三ッ畑紀子	46 新潟県中越地域における河川トンネルの分類と一考察 田口恭史 新潟大学)・大熊孝
11:40		34 わが国における観覧車の景観的系譜に関する研究 島津明 近畿大学) 岡田昌彰	
11:50	【地域・都市】 司会 五島 寧 横浜市)	【石構造物】 司会 北浦 勝 金沢大学)	
	21 地図群から見る熊本駅周辺の歴史の変遷 山田裕貴 熊本大学)・小林一郎・星野裕司・増山晃太	35 城郭石垣の反り曲線勾配部分への2次曲線の適用に関する考察 森本浩行 伏見工業高等学校)・西形達明 西田一彦・玉野富雄	
	22 地方競馬場における施設整備の歴史の変遷に関する研究 近藤紀章 滋賀県立大学)・近藤隆二郎	36 石垣の地震時挙動解析にFEMを適用する手法の可能性 田中邦熙 (社)日本公園緑地協会)	
	23 社会基盤整備に伴う地域社会への影響分析 -近代における足利市の橋梁を対象として- 深沢真吾 足利工業大学)・福島二郎 中川三朗	37 日本の石造物 灯籠・塔・添景物の発生・変遷・分類 田中邦熙 (社)日本公園緑地協会)	
13:05			
14:20	【橋梁Ⅲ】 司会 藤井 郁夫	【遺産Ⅰ】 司会 知野 泰明(日本大学)	【人物・その他】 司会 佐藤 馨一 北海道大学)
	24 日本橋と創成橋 二つの道路元標に残された共通遺産 蟹江俊仁 北海道大学)・工藤直矢・小泉正樹・川端良幸・畑山義人	38 旧富岡製糸場の建築資材と動力源燃料の調達方法に関する一考察 西尾敏和 前橋工科大学) 湯沢昭	47 日韓併合期の朝鮮半島における日本土木技術者の仕事とその組織 -朝鮮総督府組織体系の変遷と慶尚南道の道路橋建設事業- 福島秀哉 東京大学)・中井祐
	25 永代橋落橋前後の隅田川橋梁の構造比較 松村博 (財)阪神高速道路管理技術センター)	39 黎明期の電燈事業 (東京市内)における建柱架線に関する研究 鈴木悦朗 (株)新州)	48 明治5年(1872)のオランダ人お雇い技師リンドによる水準測量旅行と堀江水準標石設置 島崎武雄 (株)地域開発研究所)・市川幸男
	26 東京市施行隅田川震災復興橋梁の設計の考え方 白井芳樹 (株)オオバ)	40 産業遺産の評価方法に関する研究 ～足尾町を事例として～ 青木達也 (京都宮大学)・梅山健太郎・南風野史・永井護	49 工部大学校の土木史的意義について 北河次郎 文化庁)
	27 東京都における戦前道路橋の図面に関する調査および図面の史料性に関する考察 福井次郎 (独)土木研究所) 紅林章央		50 土木工学による邪馬台国地理の解明 小合彬生
16:00			
16:10	【橋梁Ⅳ】 司会 松村 博 (財)阪神高速道路管理技術センター)	【遺産Ⅱ】 司会 昌子 住江 関東学院大学)	【港湾】 司会 上島 顕司 国土技術政策総合研究所)
	28 歴史的鋼橋の保存・活用における保存設計の現状と課題 永田礼子 早稲田大学) 佐々木葉	41 土木遺産のまちづくり資源としての利活用意識と課題 -北海道内の土木遺産を対象として- 今尚之 北海道教育大学)・盛一馬 塚口征人	51 服部長七と品川弥二郎 - 中国地方の人造石工法 樋口輝久 岡山大学)・馬場俊介・天野武弘・片岡靖志
	29 木造橋脚の構造形態について 安達實 (株)アステック) 山下武秋 門田信一 藤田美輝 北浦勝	42 土木遺産の変遷過程と地域住民の関わり方が主観的評価に及ぼす影響 吉田長裕 大阪市立大学) 宇野陽介 日野泰雄	52 漁業権と漁業補償について -石狩湾新港建設を例にして- 田中實 元石狩町助役)・戸巻昭三
	30 弥生時代の橋について 藤井郁夫	43 歴史的土木遺産を核にした新しい街づくりの試み 中原和見 鹿児島県湧水町役場) 福吉康祐 駒走健一 阿久根芳徳 吉原不二枝 吉原進	
17:25			
17:35	総括および閉会挨拶 土木史研究編集小委員会委員長 北浦 勝		

土木遺産の保存 活用に係る連合小委員会について

土木史研究委員会は、土木学会の複数委員会と連合小委員会を組織し、土木遺産の維持管理と保存活用に関する技術的課題に総合的に取り組むこととした。

詳細は、<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum> まで。

(文化庁 北河 大次郎)

志免堅坑櫓 ‘見守り保存’へ

土木史研究委員会から「志免堅坑櫓の保全的活用に関する要請書」(2002.4.26)が提出されていた志免堅坑櫓(福岡県糟屋郡志免町)の見守り保存が決定。

詳細は、<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum> まで。

(㈱オリエンタルコンサルタンツ 山田 圭二郎)

土木史関連図書

書 名	著 者 編 者	発行所・発行年月	定価(税込)
江戸人物科学史 もう一つの文明開化を訪ねて	金子務 著	中公新書・2005年12月	\ 924-
明治文明開化の基礎を築いた、16世紀半ばから19世紀半ばまでの300年間。高瀬川の角倉了以、玉川上水の玉川兄弟、お台場の江川担庵、横須賀製鉄所の小栗上野介など36人。			
近代日本の社会と交通9 植民地の鉄道	高成鳳 著	日本経済評論社・2006年1月	\ 2,625-
台湾、朝鮮、満洲、樺太の鉄道の建設、輸送に止まらず、地域形成史として詳述する。			
港町の世界史 1.港町と海域世界、2.港町のトポグラフィ、3.港町に生きる	歴史学研究会 編	青木書店・1.2005年12月、2.2006年1月、3.2006年2月	各\ 3,780-
第1巻は港町を広域との関係において論じる。第2巻は港町の空間構成を、港湾のかたち、市街のかたち、社会のかたちの3領域に整理し分析する。特に、沿岸港と河口内港の歴史的な対比は興味深い。第3巻は、港町の人間活動に焦点をあてる。			
台湾～日本統治時代の歴史遺産を歩く～	片倉佳史 著	戎光祥出版・2004年	\ 1,890-
近代台湾において整備された建築や都市インフラを徹底的な現地取材によって紹介した労作。近代建築のみならず、新竹や高雄の駅舎、中南部に現存する製糖鉄道、基隆炭鉱選炭所、世界的な知名度を誇る阿里山森林鉄道、そして芸術空間へと再生された旧新東製糖工場など、台湾の近代土木史ならびにその現代的活用法が鮮明な写真とともに詳述されている。(岡田昌彰)			
炭鉱遺産でまちづくり	吉岡宏高 著	富士コンテム・2005年	\ 2,100- (本体)
北海道の空知炭鉱地域では、旧炭鉱遺産を活かしたユニークなまちづくりが展開し始めている(本誌第30号参照)。炭鉱がかつて形成していたコミュニティの“今日の意義”を、歴史的文脈の精査ならびにドイツ・ルール工業地帯の有識者を交えた著者自身によるまちづくり実践という「理論と実務」の両視点から提唱する。(http://www.horonai.com/より購入可)(岡田昌彰)			

(日本ランドデザイン 横松 宗治)

編集後記(お知らせ)

本号から、土木史フォーラムPDF版(カラー版!、100KB程度)のメール配信サービスを開始します。これは、皆様のお知り合いで土木史に興味のある方々に、皆様からメールを転送していただくことによって、読者を増やそうという趣旨でスタートするものです。メールに添付される回答フォームにご記入・返信いただくと、新たな読者としてメール会員に登録されます。本趣旨にご賛同・ご協力いただける方は、事務局まで(右記メールアドレス宛)ご連絡下さい。よろしくお願いします。(事務局・山田)

土木史フォーラム No.31

監 修:土木学会土木史研究委員会

発 行:土木史フォーラム小委員会

代表者 五十畑 弘(日本大学)

事務局:㈱オリエンタルコンサルタンツ 山田・伊豫屋

〒150-0036 東京都渋谷区南平町 16-28 グラスシティ渋谷

TEL.03-6311-7856(直通) FAX.03-6311-8025

Email: yamada-ki@oriconsul.co.jp

<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>

印 刷:㈱青孔社

CONTENTS

-FORUM

- Civil Engineering and its Heritages from the Viewpoint of “RESTAURO” (restoration) TAMIOKA Junro 1

-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List

- KITAGAWA Daijiro and ABE Takahiro 3

-LOCAL NEWS

- Historical Heritages around “Ryo-mo” Area TAMEKUNI Takatoshi 4

-OTHER INSTITUTIONS

- Simultaneous Exhibition of Industrial Heritages throughout Japan (zen-kin) 4

-OVERSEAS NEWS

- Report on the 2nd International Congress on Construction History ISOHATA Hiroshi 5

-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)

- Program of the 26th Annual Meeting of CHSCE (CHSCE) 6

-WHAT'S ON

- United Committee on Preservation and Utilization of Civil Engineering Heritages, JSCE KITAGAWA Daijiro 8
- Preservation of Mine Shaft Tower in Shime Town YAMADA Keijiro 8

-BOOK GUIDE

- YOKOMATSU Muneharu 8